海からきたイワン

大原 興三郎
絵 小原 拓也

海からきたイワン

大原興三郎・作　小原拓也・絵

913

大原興三郎

海からきたイワン

講談社　1979

166p　22cm（児童文学創作シリーズ）

おおはら　こうざぶろう

海からきたイワン

昭和54年11月15日　第1刷発行
昭和55年9月24日　第4刷発行

定　価　880円

著　者　大原興三郎（おおはらこうざぶろう）

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話　東京03(945)1111(大代表)

振替　東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所　株式会社黒岩大光堂

©Kôzaburô Ôhara 1979　　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

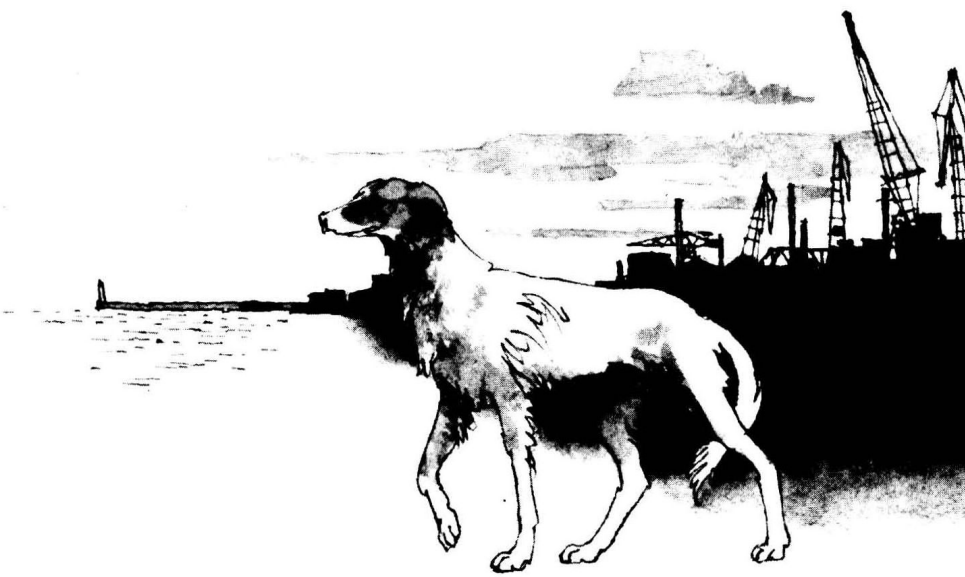
8093-189969-2253 (0)　　（児一）

海からきたイワン

もくじ

港　6
埠頭にいたボルゾイ　14
まちぶせていた敵　50
おりの中のにおい　78
かえってきた
チャイカ号　110
大男たちの船　132
ダ＝スビダーニャ　156
解説　愛することのために
三木　卓　162

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



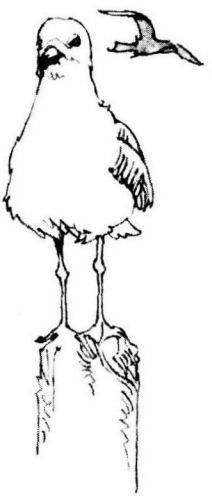
海からきたイワン

港

ここからは、港じゅうがひと目で見わたせる。のっぽのクレーンがいく本も空にむかってつきでているあたりは、船の病院〈ドック〉。陸に引き上げられた船は、まるい船尾の底までさらけだされて、とても不安そうに見える。しかられてうなだれているいたずらこぞうのように、たよりなく見えるものだ。

海にうかんで長い船体を真横から見せているのは、南の島からアルミニウムの原料、ボーキサイトを運んできた船だ。いつのまにか砂つぶ状の原料がしみこんだ岸壁は、さび朱色にそまっている。

みさきは、さび朱色の岸壁の、もっと先になる。まつの大木のつらなる林はひとすじのみどりになって、港の入り口にこころぼそそうにのびている。こらえきれなくなって海に消えたその先



端をかすめて、もうすぐチョールナボモーリャ＝チャイカ号〈黒海のかもめ号〉が、すがたをあらわすはずだった。

そうなったらイワン、いよいよおまえとおわかれだ……。

ぼくは「港湾合同庁舎」の五階にある事務所のまどから、真下を見おろした。はしけが波にうかぶかもめたちのようにくっつきあって、さん橋にゆれている。

日だまりに、イワンはねそべっていた。すんなりとのびた前足に、長い顔をのせていた。目をかるくとじてなにかを考えているような、いつものしせいだった。

イワンは、ぴくりと耳をうごかした。そして、おきを見た。ばねじかけがとつぜん働いたようにとびおきると、首がうしろにおれたように、のどもとを空にむけて、オウオオオーンと長く長くほえた。汽笛にこたえたのだ。

きた！

ぼくは、はるかなみさきに手をかざした。

おだやかな春の太陽が、無数の黄金色のかけらになって波の上におどっている。ほがらかな海だ、きょうの海は。

黒い船腹に、白い五階だてのブリッジ(船橋)。ブリッジがかぶったぼうしのような、赤いおびをまいたえんとつを、青い空にきざみこんで、チャイカ号が巨体をもてあましながら、ゆっくりとみさきをまわっている。

いよいよだ、イワン。おまえはまた、海へかえるんだ……。人が見ていたら、まるでおこっているように見えただろう。ぼくははげしい音をさせて、まどをしめた。

おこってなんかいない。これでいいのだ。磯平じいさんだって、かなしんだりはしない。イワンのために、かえってよろこんでいるはずだ……。

ぼくは一段おきに、階段をかけおりた。いそいでいないときでさえそうする、せっかちなぼくのくせなのだ。

検疫艇にのったのは、ふたりの検疫官とイワンとぼくだった。

「やっぱりかえすことにしたのかね、イワンを。」

年とったほうの検疫官丸山さんの度の強いめがねのおくの目が、ぼくをあわれむように見た。

「……ええ。」

ぼくはうなずいて、これだけ答えた。もっとなにかいおうとすると、ことばより先になみだの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ほうがこぼれてしまいそうだった。

船尾にかかげたレモン色の四角い旗がゆれた。検疫艇がうごきはじめた。一歩よろめいて、ぼくはイワンのこんもりと高くまるいせなかをだきしめた。なにがおきようとしているのか、イワンにはわからなかっただろう。イワンはよりそうぼくに鼻づらをくっつけて、太い尾を二度三度ふってみせた。

検疫艇がたてる航跡のむこうに、港の建物がどんどん遠くなっていく。防波堤のはずれのちいさな赤燈台によりかかってつり糸をたれる人かげは、もうてのひらにつかめそうにちいさい。えさでも見つけたのだろうか、はげしくゆれる波間めがけて、かもめが一わとびこんでいった。

外国の港についても、船員たちは、すぐに陸へあがることはできない。それは世界じゅうの国のとりきめなのだ。船員たちに、さだめられた伝染病の予防注射がしてあるか、いま病気の症状がないか、げんじゅうにしらべなければならない。それを検疫という。丸山さんは、それが仕事のお医者さんなのだ。

そうそう、ぼくもその検疫官のひとりなのだけれど、丸山さんとはちょっとちがう。

家畜防疫官。いかめしい名まえだけれど、つまり外国からきて日本に上陸する家畜動物の、病

気のあるなしをしらべるのを仕事にしている。

生きている動物ばかりとはかぎらない。くつやかばんになる皮、工業用に加工されるほね、食用の肉、みな、危険な細菌がついていないかどうか、きびしい検査をうける。どこの国でも国際港、国際空港には、そのための検疫所がもうけられている。

検疫のすむ前の動物どうしを接触させることも、もちろんいけない。獣医でもあるぼくは、だからかんたんに動物を船にのせたりおろしたりしてはいけないことを、知りすぎるくらい知っている。船の中に動物が飼われていて、日本にはない病気をうつされるおそれはじゅうぶんにあるのだから。それなのにぼくは、いまイワンをつれて、チャイカ号にのろうとしていた。

ビルのかべのようにぶあつい、黒い船腹が立ちはだかっている。えんとつの赤いおびに金色でえがかれた、かまとハンマーのマーク。チャイカ号は、ソビエトの貨物船なのだ。

イワンはいま、なにをしているだろう。まさかぼくのほうからのりこむなんて、思ってもいないだろう……。ぼくは、赤ら顔の大男の、ふつりあいにちいさなやさしい目を思いうかべていた。

ややこしいだろう、イワンがふたりもでてきて。そう、ぼくがいまわかれようとしているの

は、ボルゾイ犬イワン。はじめのころの名は「モリャーク」。ロシアのことばで「船乗り」という意味だ。大男のイワンは、かじとりイワン。二万トンをこえるチャイカ号をうごかす操だ手。まったくややこしいけれど、はじめイワンは、イワンに飼われていた。なぜモリャークがとちゅうからイワンになってしまったのかは、もうすこし後になってから語ることにしよう。

チャイカ号の高いデッキ（甲板）から海面すれすれに、げんてい（船腹にとりつけられているはしご）がおろされている。丸山さんたちにつづいて、ぼくはイワンの首輪をにぎって、ゆれるげんていにのりうつった。

かじとりイワンは、検疫艇にのって近づくぼくとイワンを見ていたのだろうか、のぼりきったぼくを、おおいかぶさるようにしてだいた。とびついたイワンも、いっしょにだいた。

「ナゼ、キマシタ？　モリャーク。」

かじとりイワンは、またすこしじょうずになった日本語できいた。いままでは、船をおりて自分のほうからあいにいかなければならなかった「モリャーク」が、なぜ船にきたのか、やっぱりへんに思ったのだ。

「イソヘイサン、ドウシマシタ？」

それには答えず、ぼくはいった。

「いま、時間はあるのかい、イワン。」

港についたばかりのときは、船員たちのとてもいそがしい時間なのだ。イワンは、へんじのかわりに、太いむきだしのうでに注射をするしぐさをして片目をつむり、おどけてみせた。

ぼくは、かじとりイワンのまるい肉づきのいいせなかをたたいた。

「先に検疫をすましてくるといい。それから話そう、イワン＝ポストロボービッチ。」

埠頭にいたボルゾイ

1

ぼくとイワンがはじめてであったのは、もう五年も前のことになる。やはりおだやかな春の日ざしのあふれる、午後のことだった。

検疫官の丸山さんが仕事着の白衣のまま、事務所のとびらをおしてはいってきた。

「知ってるかね、林くん、犬の密入国だ。」

「犬の？　どういうことですか。」

ぼくは、作りかけの書類から顔をあげてきいた。所長も、読んでいた新聞をつくえの上にほう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com